町家ペンキ塗り替えボランティア活動　1990年および1993年　in HAKODATE

before

after

■ 1990年8月18日（土）、19日（日）■

←左

（1）加藤家住宅：1913(大正2)年、大町8-21

【塗り替えの配色】外壁下見板：アイボリー色、窓枠・柱等：暗緑色、1階外壁漆部：白色、1階外壁木部：こげ茶色の4色

●塗り替え対象物件の選定理由：元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会は、「港町・函館における色彩文化の研究ー下見板のペンキ色彩の復原的考察を通してー」をテーマに、財団法人トヨタ財団の"身近な環境をみつめよう"第5回研究コンクールの研究助成を受け、1988・1989年の2ヶ年にわたり、西部地区を中心として、85棟の洋風下見板張り建物を対象に、ペンキ「こすり出し」調査をおこなった。この時あたかもバブル末期で、調査対象建物の加藤家住宅もマンション業者の攻勢にあって売却寸前のところであった。こすり出し調査をし、建物の履歴についてヒアリングをしていた時に、居住者である一人暮らしの加藤てるさんが、できるなら亡きご主人との思い出深いこの建物で住み続けたいと希望していることを聞きつけ、なんとか加藤さんを元気づけようと、記念すべき初めてのペンキ塗りボランティア活動をおこなった。

●塗り替える色の方針：①西部地区の町並み景観との調和、建物の周囲の環境や建物自体の建築様式との調和、②外壁と窓枠・柱等を異なる色で塗り分け、建物にメリハリをつけること、を考慮した。外壁は塗り替え前の白っぽい色を踏襲してアイボリー色とし、窓枠・柱等はこの建物が立地する港湾地区によく見られる緑系の暗緑色の2色に塗り分け、1階部分の和風意匠についてはそれらの色に調和するよう、外壁漆部は白色を、外壁木部はこげ茶色を選んだ。

【参加者】太田誠一、河内貞子、陳　有崎、松下重雄、村岡武司、森下　満、柳田良造、山本真也、米谷哲平、渡辺謙作（以上元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会）、米沢猛夫（北海道ニッペ販売㈱）、以上11名

【協力者】加藤（建物所有者、昼食の差し入れ）、小畑総業㈱（足場の手配）、米沢猛夫（ペンキ塗料、ハケ等材料一式の手配）、陳有崎（足場の交渉、ハケ等ペンキ用具の保管、軽トラック）、柳田石塚建築設計画事務所（CGシミュレーション作業の協力ーハード・ソフトおよびプリンターの利用）

before

after

■ 1993年7月4日（日）■

→右

（2）小森商店：1901(明治34)年、弁天町23-14

【塗り替えの配色】外壁下見板：明るい黄緑色、窓枠・柱等：暗い黄緑色の2色

●塗り替え対象物件の選定理由：上記の研究コンクールで最優秀賞に選ばれ、賞金二千万円を獲得した。これを寄附して「公益信託函館色彩まちづくり基金」（愛称、函館からトラスト）を設定し、函館の市民まちづくり活動への助成事業をおこなう仕組みをつくった。そのスタート記念イベントである函館からムーブメントウィークのワークショップの一つ、町家ペンキ塗り替えの対象として、現存する洋風下見板張り建物としては最も古い、1901（明治34）年創建の小森商店を選んだ。

●塗り替える色の方針：外壁は、こすり出し調査の結果、創建時の色と推定される明るい黄緑色に、窓枠・柱等については創建時の色が不明であったため、外壁の明るい黄緑色に調和し、かつこの建物が立地する港湾地区によく見られる緑系の色として暗い黄緑色を選んだ。

【参加者】大石道正、山内一男、米谷哲平、渡辺謙作（以上元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会）、江藤智序、大窪知明、佐藤純昭、寺内祐生（以上北海道大学工学部建築工学科住居学講座・大学院修士課程1年）、他3名、以上11名

【協力者】小森（建物所有者）、小畑総業㈱（足場の手配）、北海道ニッペ販売㈱・米沢猛夫（ペンキ塗料、ハケ等材料一式の手配）、元町倶楽部・陳有崎（足場の交渉、ハケ等ペンキ用具の保管、軽トラック）、柳田石塚建築設計画事務所（CGシミュレーション作業の協力ーハード・ソフトおよびプリンターの利用）

※以上敬称略